

平成24年9月23日(日)に福祉の家集会室において、「第2回地域福祉のための講演会」が開催されました。これは、市がこれから作成する「長久手市地域福祉計画」を行政だけでなく広く市民の方と一緒に考えていくためのきっかけづくりとして開催しているものです。

第2回目は、講師に滋賀県東近江市介護保険推進全国サミット事務局の北川憲司さんを迎え、「地域の持続可能な共生の仕組みづくりについて」講演をいただきました。当日は、福祉関係者のみならず、幅広く活躍する市民のみなさん、また市職員も参加し、参加者全員、大いに興味を持って北川さんのお話しに耳を傾けました。

講演会前、北川さんから本市に電話をいただき、「今、長久手で困っていることは何ですか?」とお尋ねがありました。その電話を受けた職員は、「困っていることですか…」と答えがとっさに出てこなかったといいます。その報告を受けた市長は、次のように話していました。

長久手市は、先人たちの努力のおかげで、整備が進み、市の施設も整い、狭い市域にもかかわらず、県や大学の施設もあり、このご時世に人口も増えています。また、トヨタ博物館やモリコロパークのような観光施設にも恵まれています。

私は、何度か東近江市を訪れていますが、東近江市は長久手に比べると何もありません。でも、その東近江市に厚生労働省の新人職員が毎年研修に赴き、そこで行われる「介護保険推進全国サミット」に、全国から多くの人が集ってきます。それはどうしてだろうかと考えたときに、東近江市には何もないからこそ、そこで暮らす人々が知恵を出し合い、手をつなぎ、そして人が育ち、今があるんだと思います。

私は、ここ長久手でも、今、人を育てることが大事なことで考えています。市民のみなさんを、その前に職員を育てたい。職員はどんどん他市町の取り組みを見に行き、勉強をし、私に提案してほしい。職員400人がその心意気を持てば、このまちは絶対に変わります。職員にとっても、その経験は、仕事以外でも地域で活かせるはずですよ。



長久手市は若いまちと言われているようですが、必ず高齢化します。その時に人が育っていることが必要です。だからこそ、今からそれに取り組みたいと思っています。市民まつりなどを通じて交流することも大切ですが、まず、町中で知り合っ、交流する方がはるかに大切だと思います。「あいさつ運動」も、“あいさつをすること”が目的じゃありません。その目的は、“知り合うこと、仲良くなること”です。

今までの社会で生きてきた人は、何かに取り組みたいと模索し、そして、その目標を見つけると目的に向かって突っ走ります。目的に向かって突っ走ることが目的になっているような気がします。しかし、そうじゃないと思います。これらから地域の人たちには、組織化したところに参加するだけでなく、自分たちで仲間を作り、思うように活動してくれればと思っています。

東近江市は、人口、面積ともに日本のほぼ 1000 分の 1 であることから、地域モデルとなりえる要素をバランスよく含んでいる地域だそうです。また、市民・企業・NPO・行政などの参加と連携によって持続的な発展ができる、共生の仕組みを持つ地域です。

総務省は地域活性化につながる取り組みとして、「緑の分権改革」を提唱し、東近江市はそのモデルの一つとして紹介されました。

平成 24 年 9 月 23 日（日）に行われた北川憲司さんの講演の内容を抜粋して紹介します。

私は、滋賀県東近江市から参りました。今度、10月4、5、6日に東近江市で行政やNPOの方を集めて「介護保険推進全国サミット in ひがしおうみ」を開催しますが、その申込者を集計して驚きました。近くの大阪や京都より三重、岐阜、愛知、静岡の方が圧倒的に多い。関西と東海を比較すると1対1.5以上です。中部圏は元気だなあと実感しています。

滋賀県は、第2次産業に特化した県で、税収もいい。大阪や京都より豊かだと言っていると思います。ところが、最近、滋賀県東近江市と三重県桑名市を結ぶ国道に長いトンネルが開通したのですが、桑名、長島あたりは、滋賀と比べ、もっと豊かなことがわかりました。仕事の関係で愛知県の高浜市や豊田市にも行きますが、住宅やまちの感じがもっと豊かです。そこに住んでいると日本の中での立ち位置がわからなくなりなりますが、とにかくこの辺りは豊かなところですよ。



しかし、気がかりなことがあります。桑名、豊田、長久手、雰囲気似ているんです。これはこの3市に限ったことでなく、中部圏全体で言えることかもしれませんが、田舎だったところが、区画整理等によって、突然、大量のお金が投入されて整備された。問題が起きたとき、自分たちで解決しよう、何とかしようという前に、一気に整備されてしまった。だから役所と住民には、上下関係があり、住民には、上から何かをいただく意識、ぶら下がり意識があるんですね。滋賀県は一気に整備が進まなかったおかげで、そのあたりがまだ大丈夫なんです。

今日、私は電車で参りましたが、藤が丘駅に着いたときに、役所の方に「長久手で最初に区画整理が行われ地域を見せてほしい」とお願いしました。地域を回ると次のようなことがわかるんですね。「あのハウスメーカーのプレハブ住宅が多いから、区画整理は昭和50年代最初のころだなあ」とか、「2世帯で住もうと思うと3階建てが増える。あまり3階建てがないから、同居は進んでいないなあ」とか。

昭和50年代最初の建物が多いということは、そこに暮らす人は退職年齢を迎

えているところです。その頃は経済成長の真っ只中で、子どもに学を付けようと、みなさん頑張っておられた。でも、その当時は気づかなかったんですね。子どもに学を付けると、子どもは外に出て行ってしまうことに。そうするといずれ夫婦だけ、または独居世帯になります。今日、見せてもらった地域を見て、私は、長久手市も10～15年後には、三重県のある都市の団地になってしまうと思ったんです。

その市には、1つの団地だけで人口が5万人のところや、近鉄が開発した1～2万人規模の団地がいくつかあります。そうした団地の自治会長さんに、若いときと比べて、どう変わったか尋ねると、「スーパーと銀行が消えていく。今は車で買い物に行けるが、運転できなくなったらどうしよう」と言うわけです。「買い物ができなくなったらどうしよう…」とあるがまま、なすがまま、困っているだけです。自分たちで何とかしよう、何かやろうという思いは弱いんですね。

長久手市も、今は財政状況がまあまあですが、税収の体質がよくないですね。今後いずれ一気に悪くなる。その時に危ないのは、長湫地区やと思います。今は華やかだけど、三重県の市と同じような状況が起きるはずです。いずれスーパーや銀行がなくなって、現実主義の女性は「便利な駅前に引っ越したい」と言い出します。そうして人がいなくなり、ますますスーパー、コンビニが地域から消えていく…という悪循環が始まるのです。そうなっていくと、いずれ長久手市でも、買い物支援が必要になる。そのときに、例えば、移動販売を障がいの人やニートの人、ハンディキャップがある人がやってもいい。人としゃべる、値切り交渉に応じる、そうしたことがリハビリになるんです。

長久手市の東部は大丈夫ですよ。田んぼのあるところは強い。まず、食べ物がある。そして、まだコミュニティが残っている。このように、長久手市は異なる地域が存在するので、地域ごとにやるべきことは違うし、それをどう組み合わせるかだと思います。

ここで話をガラッと変えます。

今日はボランティアで活躍されている方も大勢参加していらっしゃると思いますが、私は、ボランティアだけで物事がうまくいくとか、地域を支えられるとは思っていないんです。ボランティアって正直しんどいんですよ。地域を支える仕組みは、特別な人ではなく、普通の人が続けられる仕組み、ランニングコストを担保できるような仕組みにしないとダメだと思うんです。よく「ボランティアなんだから、お金をもらうなんて、とんでもない」というボランティアさんがみえますが、私は有償ボランティア、大いに結構だと思います。もらったお金をプールして、次の事業の財源にすればいいんです。

あとね、住民も物事を「制度」の中で考えるんですね。おかしい話です。制度ってものは、もともと地域や自分たちで立ち行かなくなったことを国が助けるために「制度」にして縦割りを作ったのに、なんで地域の住民が自分たちのためになることを考えるときに、制度の中で考えなあかんの？ 動かんとかあかんの？ と思います。

介護、医療、子育ては、全国的に制度で動いている。それを担うところが、大規模化してチェーン化すると地域との関係は欠落します。しかし、私はこう思うんです。地域との関係をベタベタなものにする必要があると。例えば、「要援護の高齢者が、学童保育や保育園の子を世話をしてあかんの？」とか、「知的障がいのある人が、高齢者のヘルパーをしてあかんの？」とか、「障がいのある人が、レストランをやってあかんの？ 移動販売をしてあかんの？」です。これらはすべて、近々、東近江市で始めようとしていることです。

デイサービスという言葉。みなさん、固定的に考えていませんか？何も介護だけの言葉、建物を指す言葉じゃありません。学校、保育園、病院、ござらっせ等々、昼間に受けるサービスすべてがデイサービスです。それらをつなげていくと、何か面白いことができるはずですよ。ちなみに駅前の飲み屋はナイトサービスです。

吉田市長もよくおっしゃっていますが、今、時代の潮目が来ているんだと思います。今までは、企業で働く男性が世の中の資産だと考えられていた。資産を生まない子どもや高齢者、農業は財産とは考えられてこなかった。しかし、今、この含み資産が、確実に資産になろうとしている。

長久手市には、まだまだノビシロが多い。失敗しても立ち上がれる余力がある。今のうちに、いろいろと手を打つべきです。どうにもならん状態になってから、何とかしようと思っても何ともならん。今から手を打てばまだ、間に合うのです。

東近江市には、「フード、エネルギー、ケアの自給圏を目指し、多様な主体の参加と連携による持続的発展が可能な共生の仕組み」という市内で活動するNPOや団体をまとめた一覧表があります。これは、市役所ではなく、「魅知普請の創寄り」という東近江市内のキーマンが集う会、つまりは飲み会が作っています。飲むことで情報交換をしているんです。“話をする → 面白いと思う → やってみよう” となるわけです。

こんな一覧表は、行政では作れませんよ。なぜなら、行政は現場を知らないから。名前、個人情報バンバン載っていますから。作り始めた当初は、A4サイズ1枚の小さなものでしたが、3年かかってA3サイズまでになりました。間もなく10月に改訂版が出ます。ここに載っている団体で消えたところもあれば、新たに加わる団体もあります。

この一覧表に掲載する団体には3つのルールがあります。①行政にぶら下がらない。なぜなら、行政は頼りないからです。②プラス思考であること。例えば、高齢者が増えると嘆くより、「介護で儲かるがな」と前向きに考えることができ

る人間の集まりであることです。③手をつなぐ楽しさを知っている。自分たちだけで活動を完結する人たちはいません。

東近江市長からは、「この仕組みは、行政がコントロールできないものにしてほしい」と言われています。トップ（＝市長）が変わったときに、仕組みがダメにならないためにです。ぜひ、長久手でもこの一覧表を作ってみてください。言っときますが、絶対に行政では作れませんよ。

行政や社協には、退職者＝下請けと考える節がある。民間で苦勞した人を行政が使いこなせるわけがないし、そうした下心を退職者側も敏感に感じ取るんですね。それで、“下請けは嫌だから参加しない → 家に閉じこもる → 介護保険のお世話になる…”となるわけです。

退職した男性が求めているもの。それは友達なんです。行政や社協は、ここを理解してその部分を支援すべきです。仲間づくりをして、その延長が山登りでもいいんです。山登りに行って健康になれば健康保険を使わない。それも立派な社会貢献です。でも、欲を言えば、いわゆる社会貢献をしてほしい。犬の散歩をしている人にスクールガードを兼ねてもらえば、それは社会のプラスになります。

私が考える退職男性の仲間づくり、地域デビューがうまくいくポイントをまとめましたので、ぜひ、参考にしていただければと思います。

## ●退職男性の仲間づくり、地域デビューがうまくいくポイント（抜粋）●

### \* 仲間グループができるポイント

仲間づくりにつながる料理教室は、男だけのメンバーにする方が無難であること。

決して仲間グループを、ボランティアグループ、地域活動グループと勘違いしないこと。

### \* 仲間グループが継続できるポイント

基本は自己責任であり、誰かの責任にしないこと。

過去の肩書を捨てられること。

過去のスキルは大事にしながらも、善意であっても、他の人に決して押し付けないこと。

上下関係がないこと、行下関係がないので物事が決まるのに時間がかかると知ること。

規則を作らずとも見渡せる、メンバーの数は身の丈（20人ぐらい）であること。

クッション材になる年配の人（年齢でなく経験と人望）がいる方がよいこと。

集まりへの遅刻、早退、自由であること。

グループへの出入りは、自由であること、規則を作らない方がよいということ。

月1回は、情報交換会を持つとか出会いが必要であること。

連絡体制が課題になるので、集まる日時は定期で決めておく方が無理がないこと。

### \* 地域活動の心がけポイント

仲間グループでは、情報提供しても地域活動を無理強いしないこと。

地域活動では、可能なら外で体を動かせるほうが満足感があること。

できれば農、林など自然に絡むことも楽しいこと。

地域活動でも、飲み食いがあるので、新たな仲間ができること。

若い人、子どもとか女性が参加している活動から元気をもらえること。

### \* 要するに

義務でなく楽しいこと、そして何よりも仲間がつくれること。

長続きの秘訣…仲間、顔見知りを作る、喜び、楽しみが必要。健康、料理。

最後にその結果、地域に役立つことならそれに越したことはないこと。

いわゆる結果ボラ、余力ボラ。